

# 団地の幼児

多勢豊次

「団地」の出現は世界的な傾向で、われわれもいつの間にか、「すまい」にたいする意識を変えてしまいました。手狭い便りさ、両隣りからの独立性、さらに移動の容易さなどは、ダイナミックな近代生活を楽しもうとする若い夫婦にとって、たいへん魅力あるものです。しかし反面、生活様式の画一化や閉鎖性などの問題が生まれ、これらの解決策の一つとして、たとえば欧米のいろいろな団地など

では、住宅の形にいくつかの型があり、入居者に少しでもうるおのある住い方をしてもらおうとしているそうです。

新しい住居形態としての団地は、厚生省の統計によれば二十代、三十代の若夫婦とこれらの幼児による社会であることが明らかになっています。したがって、団地の有する独特な性質は当然、親の育児態度や幼児のパーソナリティー形成に、何らかの作用を及ぼしているにちがいありません。団地の増加にともなう近年、団地を対象とした心理学的・社会学的研究が見られるようになりましたが、主に成人の生活状態に関するものが多く、幼児に関するものは少ないようです。しかし二、三の研究の結果では、次のようなことが報告されています。

## 〈幼児のパーソナリティーについて〉

一、仲間相互の交渉活動という点ではすぐれているが、社会的成熟度では劣っている。(岩城富美子、昭和三十六年)しかしある保育所の場合は逆に、相互活動が不活発でありまた、別な団地幼児では社会成熟度は対象群と大差ない。(守屋光雄、昭和三七年)

二、習慣形成は団地群と対象群との間に有意な差がない。(岩城)しかし、いくつかの事柄においては、団地群の方が早い傾向にある。(守屋)

## 〈親の育児態度について〉

一、計画的—自然的、嚴格—寛容という面から親自身に評定させた  
が、団地群、対象群の間には差が認められない。(守屋) 岩城氏  
の調査でも両群に差が出ていません。

二、習慣訓練の開始および完了は、団地群の方がずっと早い。(守  
屋) しかし岩城氏の方では両群に差が認められません。

このように、それぞれ一致しない結果の出ることは、調査した幼  
児や母親の選び方や、観察方法に問題があると考えられます。守屋  
氏も述べているように、同じ団地と言っても地域、生活水準、入居  
年数がかなり異なっています。また自由あそびの観察方法において  
は、岩城氏は「歩く、話す、友人を見る」などの基本動作にしたが  
って採点し、守屋氏はバーテンや田中等のカテゴリーによっていま  
す。

さて以上のような調査結果をみると、団地という特殊な住居形態  
の及ぼす影響がまだまだ不明であり、どういう条件がどのように働  
いているか全く今後の研究に待つ以外にありません。

ところで昨年の春、母親の育児態度について愛育研究所が行なっ  
た団地の調査の一部を御紹介してみれば、何らかの手がかりを提供  
できるのではないかと思います。

#### 〈調査の対象〉

三才から六才までの幼児をもち、東京近郊の団地に住んでいる母  
親を選びました。ただし団地と言っても、隣り近所が全く無関係な  
団地と、いわゆる社宅の団地とがあるので、我々はこれを区別しま  
した。団地群との比較として、個別住宅に住む母親も選びました。

#### 〈調査の方法〉

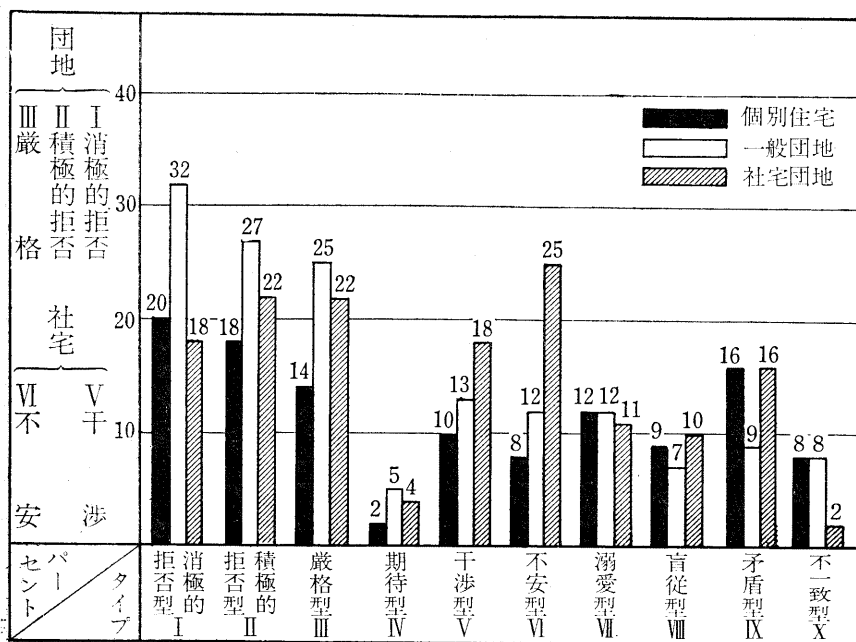
田中教育研究所の親子関係診断テストの両親用をいくらか幼児同  
きに改訂し、母親に記入してもらいました。

#### 〈調査の結果〉

田研式テストでは、親の態度が一〇の類型(消極的拒否、積極的拒  
否、嚴格、期待、干渉、不安、盲従、溺愛、矛盾、不一致)に分け  
られ、それぞれがバーセンタイルによって類型の強さが見られるよ  
うになっています。そこで、危険度とされる二〇バーセンタイル以  
下の頻数を出したところが、次頁表のような結果になりました。

これを見ると、大体、一般団地や社宅団地の方が個別住宅よりも、  
タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵにおいて傾向が強いようです。しかも統  
計的検定をかけてみたら、次頁表のように、一般団地群ではⅠ、Ⅱ、Ⅲ  
社宅団地群ではⅤ、Ⅵにおいて有意差のあることがわかりました。

そこでこれらのことから、次のような推論ができそうではないか  
と思われます。一般団地では大体、タイプⅠ、Ⅱ、Ⅲが強いが、これ



は必ずしも、いわゆる愛情欠如による拒否的傾向が強いということではない。親が子どもに期待する水準の行動、たとえばお行儀をよくするとか、きちんとおけいごをすることとかの行動をいつも要求しようとするので、子ども自身の欲求や気持の状態を受け入れず、ある一定の方向に子どもを叱咤し操って行こうとするのではない。

また一般団地と社宅団地との間のちがいは大へん興味あることです。一般団地はⅠ、Ⅱ、Ⅲ、社宅団地はⅤ、Ⅵとはっきりわかれたのは何故か。これは一般団地では隣人が単なる無関係な他人であるのに、社宅団地では何らかの感情的、利害的関係をもたざるを得ないのではないか。一般団地の母親は無関係な隣人との間に自ら壁を作って、心理的にまた实际的にも孤立性を保とうとするので、子どももその閉ざされた空間の中に一緒に押し込めてしまう。つまり、なるべく他の家にも子どもを遊びにやるとしたり、子どもが友だちに余計なことをしゃべったりしないようにしたりするわけです。調査に当って私どもは、それぞれの団地の集会所で、数人のお母さん方と話し合って、感じている問題を伺ったところ、他の家庭との交流が少ないことや、いろいろなことを他から知られたくないという気持を、多くのお母さん方が述べていました。

さて、そのように子どもも心理的、物理的に一緒に押し込めてし

まうと、母子だけという狭い関係の中では、母親の子どもに対する支配ないしは統制が大きくなる可能性があります。タイプⅠ（消極的拒否）、Ⅱ（積極的拒否）、Ⅲ（厳格）などは、母親による支配ないし統制の強さをあらわすものなのです。

一方、同じ団地でも社宅団地の方には別なダイナミックスが働いています。前述のように、互いに感情的、利害の関係をもつので、母親間の交渉が多くなる。壁をつくって孤立したら、かえって変だし、とやかく言われたりします。子どもは母親との狭い空間の中に押しこめられず、かなり他の家の子とも遊ぶようになります。しかし母親としては、他の家庭とのテリケートで「大事な」関係を、子どもものうっかりした行為や発言によって破壊されたり、ヒビを入れたりすることを怖れます。また、子どもの服装、持ち物、遊び方、話し方、その他いろいろな態度についても、他の母親からの評価を内心いろいろと気にかけています。

その結果、一般団地の母親のように子どもを自分の統制下におくというのではなく、かなり子どもの自主性を尊重しながらも、子どもの行動や発言に内心、不安を抱きながら、その都度、いろいろな形で干渉を加えて行くのではないか。タイプⅣ（不安）、タイプⅤ（干渉）の強いことは社宅団地の母親のおかれた状態から生ずるものと思われれます。

さて、同じ団地と言っても、このように一般団地と社宅団地における母親の育児態度に差異が出て来ますので、幼児のパーソナリティーの形成に与える影響も、かなり区別して考えなければならぬようです。前述の守屋氏や岩城氏の調査では、社会性ないし社交性、社会成熟度、習慣形成などが一致していませんが、一般団地と社宅団地ということだけからでも、当然差異が出てくるのが考えられます。おそらく、いわゆる社交性では社宅団地の幼児の方が早く伸びるかも知れませんが、社会成熟や習慣形成の中の特定の事柄では、逆に一般団地の幼児の方が良い場合もあるでしょう。

これらの予想は今後の研究に期待する以外にないわけですが、ともかくはつきり言えることは、団地は何らかの意味で母親の好ましくない育児態度を生ぜさせるところだということです。私どもの調査では個別住宅との差異が一般団地、社宅団地ともに出ているわけです。

しかし、育児態度以外の面での良い影響を団地は母親や幼児にいろいろと与えているかも知れません。この点については、また別な角度からいろいろと検討して行くことが必要だと考えています。

（愛育研究所）